

日本鱗翅学会中国支部会報

第13号



2012年4月

日本鱗翅学会中国支部

日本鱗翅学会中国支部規約

2001年12月2日制定、2005年11月26日改正

第1章 総則

(名称)

第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。

(目的)

第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。

(事務局)

第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。

(事業)

第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
- (2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
- (3) その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- (1) 支部長 1名
- (2) 事務局幹事 1名
- (3) 幹事 4名
- (4) 会計 1名

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。

幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出、自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。

事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。

会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。

事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。

幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。

会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。

事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。

幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。

会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。

例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。

総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。

総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。

会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。

- (1) 支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
- (2) 支部助成金(本部に申請)
- (3) 寄付金、その他

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

この規約は、平成14年1月1日から実施する。

この規約は、平成18年1月1日から実施する。

(支部例会について: 第4回支部総会申合せ事項)

2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。

参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

総会開催中は会員外の者の傍聴は認めるが、発言権、議決権は認めない。

第 13 回日本鱗翅学会中国支部例会の報告

毎年、中国支部例会は中国 5 県が持ち回りで実施しています。2011 年は広島県が担当で、11 月 19 日(土)に広島市中区の RCC 文化センターで開催しました。参加者はやや少なめの 15 名でしたが、活発な議論や意見交換が行われました。

研究発表・話題提供(敬称略)(*演者)

1. 「鳥取県のが類に関する文献目録」: 田村昭夫

鳥取県産が類の文献を紹介しながら、報告例が少ないことが指摘されました。出席者からは、今後は営林署や農業試験センターの農業害虫の報告書を調べたらどうかという意見がありました。

2. 「岡山県のカトカラ属-その生態写真」: 伊藤國彦*・難波通孝

多数の美しい生態写真を使って、岡山県産カトカラ属の全種が紹介されました。貴重な幼虫の生態写真や、成虫の樹幹下部にとまる習性などが詳しく解説されましたが、とりわけ成虫の美しい後翅が写った画像では、参加者一同の目が釘付けになりました。来年はカトカラをやってみたいと思った参加者も多かったようです。

3. 「『山口県の昆虫類レッドリスト 2011』における鱗翅目の選定について」: 後藤和夫*・川元 裕・中西 淳

先日、山口むしの会が出版した『山口県の昆虫類レッドリスト 2011』と、それに掲載されている鱗翅類が報告されました。出版された冊子は見事なできばえで、例会に持参された分はすぐに完売しました。

4. 「山口県南西部におけるフチグロトゲエダシャクの記録と生態」: 渡辺一雄*・管 哲郎・後藤和夫・岡村元昭・中西 淳

近年、山口県防府市で発見されたフチグロトゲエダシャクについて、多数の写真や成虫標本、蛹などを交えて、その生態が詳しく紹介されました。非常に興味深い生態も確認されているので、今後の調査における更なる進展が期待されます。

5. 「冠高原のミナミアカシジミについて」: 神垣健司

東アジアにおけるミナミアカシジミの分布と、中国地方における冠高原以外での発見の可能性などについて紹介しました。

6. 「インドネシア・ビリトン島のアリノスシジミ」: 淀江賢一郎

ビリトン島の様子と、そこに生息するアリノスシジミの興味深い生態について紹介されました。凶暴なツムギアリを利用して繁殖するアリノスシジミは、まさに怪蝶といえます。



第 13 回例会の一こま
2011 年 11 月 19 日
広島 RCC 文化センターにて
機材は本田先生にお借りしました。

例会

三宅評議員から評議員会の報告があり(将来計画特別委員会からの諮問についてなども), 本田理事からは最近の鱗翅学会本部の動向などについての報告がありました。若い新入会員を確保するため, どのような方法をとれば良いかなど, 活発な議論がありました。

次に, 淀江支部長から中国支部の事業報告・会計報告があり, あわせて支部の現状や今後の体制などについて出席者で議論しました。また, 来年の支部例会は岡山県で開催することになりました。(後日, 11月17日(土)岡山国際交流センターに決定)。

2011年会計報告, 2012年予算案の掲載は割愛します。



懇親会

時計を見るとまだ17時10分だ。

懇親会

総会終了後, 隣室にて懇親会が行われました。出席者はそれぞれ情報交換や近況報告など, 話題は尽きないまま, あつという間に時間が過ぎて, 19時に懇親会は終了となりました。その後は有志で, 渡辺先生の案内で流川のネオン街を歩き, 居ごちよいバーに入って, 夜がふけるまで話は続いたのでした。

参加者(敬称略:順不同)

伊藤國彦, 三宅誠治, 若槻匡志, 田村昭夫, 渡辺一雄, 若林増樹, 本田計一, 青木暁太郎, 鎌田博, 後藤和夫, 中井衛, 布目和子, 武次房江, 淀江賢一郎, 若林増樹, 神垣健司。 (以上報告:神垣健司)

お知らせ

1. 第14回支部例会のご案内

詳細は改めてお知らせします。お誘い合わせてご参加下さい。

他の予定と重ならないようカレンダーにメモをどうぞ。

○会場: 岡山国際交流センター(岡山駅から徒歩5分)

○日時: 2012年11月17日(土曜日)午後1~5時

○参加費: 会員500円, 非会員1,000円

2. 支部助成金

2012年度の支部助成金を2011年12月に申請し, 2012年3月25日の評議員会で承認されました。39,650円です。支部会報13号の印刷費, 郵送費, 例会会場費などの一部に充当されます。

3. 支部会報14号の原稿を募集

2013年4月に発行予定の第14号の原稿および表紙写真を募集します。

書評・論文紹介・紀行文・近況などの軽い読み物をお寄せください。

鳥取県のガ類に関する文献目録

田村 昭夫(鳥取県)

筆者は、鳥取県にてガ類を採集し、その成果を筆者が所属する鳥取昆虫同好会誌“ゆらぎあ”等で発表している。採集記録を発表する中で、“ゆらぎあ”誌上においていくつかの鳥取県に関する文献を発表してきた(田村, 2000, 2001)。また六虫会等に参加したおり、文献収集への協力を依頼した。同好者の好意で、漸く70編余りを収集することが出来た。これらに記録された蛾類については、すべて筆者のデータベースに保管している。

誘蛾燈188号にて、西尾氏から鳥取県等からの総説が見当たらないとの指摘もあり(西尾, 2007), 筆者が今まで収集した鳥取県のガ類に関する文献目録を作製することにした。また漏れた文献にお気づきの方は、ご教示願えれば幸いである。

目録形式で最初に鳥取県の蛾類目録が出たのは、東 光治(1939)の“鳥取地方の砂丘に於ける昆蟲相”(関西昆蟲学会)である。そこには、5科 7種が記録されている。1995年には増井武彦氏から“鳥取砂丘の蛾”13科 134種が発表された。一方大山については、中島秀雄(1978)“伯耆大山山頂の蛾類”で山頂の蛾を30種報告している。2001年には、伯耆大山生物誌(東正雄)に大山の蛾類339種が報告されている。1996年には大阪市立自然史博物館より“収蔵資料目録28 青木浩昆虫コレクション目録”が出され、そこに18科 173種が報告されている。島根県からも“すかしば”を通して幾つか発表されている。

地元鳥取からは、鳥取県立博物館から“鳥取県立博物館収蔵目録37 昆虫類目録6(1988)”が出された。そこには24科367種が記録された。これは、県内で最初に出されたまとまった目録である。鳥取県立博物館からは、研究報告などで昆虫調査の一環で他の昆虫と一緒に採集目録が見られる。鳥取昆虫同好会からは“中部地区周辺の蛾 1. 鳥取県中部地区周辺のカトカラの分布について(I)”が最初のまとまった記録である。その後、2000年に“中部地区周辺の蛾 2”2001年に“中部地区周辺の蛾 3”が発表された。最近では同好会機関誌“ゆらぎあ”にて、矢野重明氏による“鳥取県西部産蛾類資料”が2007年より発表されるようになった。現在は“鳥取県西部産蛾類資料 5(2011)”まで発表された。今後の展開が楽しみである。

徐々に蛾類リストはまとまりつつあり、今後は文献リストと蛾類目録の作成を目指していきたい。

引用文献

西尾規孝(2007) *Catocala* の都道府県別分布概況. 誘蛾燈, (188): 61–68.

参考文献

東 光治(1939)鳥取地方の砂丘に於ける昆蟲相. 關西昆蟲學會々報, (8): 25–46. 關西昆蟲學會.

東 正雄(2001)伯耆大山生物誌. 東生物研究所. 640 pp.

長谷川寿一・松田裕一・田村昭夫(1994)中部地区周辺の蛾1 鳥取県中部地区周辺のカトカラの分布について(I).

ゆらぎあ, (12): 6–9.

前波鉄也・門脇久志(1975)伯耆大山の蛾類メモ. すかしば, (5): 14–16.

増井武彦(1995)鳥取砂丘の蛾. 誘蛾燈, (140): 83–87.

宮武頼夫(編)(1996)大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第28集青木浩昆虫コレクション目録, 大阪市立自然史博物館.

中島秀雄(1978)伯耆大山山頂の蛾類. 誘蛾燈, (74): 147–149.

野村幸弘(1988)鳥取県立博物館収蔵目録37. 昆虫類目録(6). 鳥取県立博物館.

田村昭夫・長谷川寿一・松田裕一(2000)中部地区周辺の蛾2.鳥取県中部地区周辺のガ類目録I. ゆらぎあ, (18): 1–22.

田村昭夫・長谷川寿一・山脇清高(2001)中部地区周辺の蛾3.鳥取県中部地区周辺のガ類目録II. ゆらぎあ, (19): 1–17.

矢野重明(2007)鳥取県西部産蛾類資料(1). ゆらぎあ, (25): 10–15.

矢野重明(2008a)鳥取県西部産蛾類資料(2). ゆらぎあ, (26): 4–8.

矢野重明(2008b)鳥取県西部産蛾類資料(3). ゆらぎあ, (26): 9–16.

矢野重明(2010)鳥取県西部産蛾類資料(4). ゆらぎあ, (27): 9–12.

矢野重明(2011)鳥取県西部産蛾類資料(5). ゆらぎあ, (29): 14–19.

淀江賢一郎・尾原和夫・祖田 周(2000)鳥取県会見町の昆虫類. すかしば, (48): 1–25.

岡山県のカトカラ属—その生態写真

伊藤國彦*・難波通孝(岡山県)

古い話で恐縮ですが、岡山県のカトカラ属の生態について報告する。

1984年岡山昆虫談話会が結成され、当時未解明であったフシキキシタバ幼生期解明を目的に活動をした。主たる参加者は、著者等に加え榎本精二、那須敏、安藤瑞夫の各氏であった。その調査経過でカトカラ属16種の幼生期の確認ができ、主目的のフシキキシタバの食樹解明がなされた。

それらの結果は各種情報誌(「月刊むし」、「昆虫と自然」など)に報告したが、当時はカラー印刷は稀で、生態写真も白黒で、しかも枚数も限られせつかくの生態写真が埋もれたままになった。今回の報告は、当時の未公開写真と、その後の調査により明らかになった岡山県産23種の生態写真を披露し、今後の中国地方でのカトカラ属の生態や分布解明に多少でも情報を提供したいと考えている。

注:地名(市町村名)は、調査時点のものを使用。写真撮影は難波通孝。

関連文献

伊藤國彦(1984)アベマキを食するフシキキシタバ幼虫の発見. 蛾類通信, (129): 51-52.

難波通孝(1984)ムラサキシタバの幼虫を採集. 昆虫と自然, 19(14): 7-8.

那須敏(1984)フシキキシタバ幼虫発見始末記. 月刊むし, (165): 27-28.

岡山昆虫談話会編(1985a)岡山県の *Catocala* 属(上). 昆虫と自然, 20(3): 36-37.

岡山昆虫談話会編(1985b)岡山県の *Catocala* 属(下). 昆虫と自然, 20(4): 20-24.



アサマキシタバ 1984.5.28 岡山市奥矢津
食樹:アベマキ



アサマキシタバ 1984.6.4 岡山市奥矢津



アサマキシタバ 1984.6.5 岡山市奥矢津(糖蜜)



アミメキシタバ 1984.5.29 岡山市金山
食樹:アラカシ



アミメキシタバ 2011.8.15 岡山市東区芥子山



アミメキシタバ 2011.8.27 岡山市東区芥子山



ウスイロキシタバ 2011.6.26 岡山市芥子山



ウスイロキシタバ 2011.6.26 岡山市芥子山



エゾシロキシタバ 1984.9.1 奥津町森林公園



エゾベニシタバ 1984.7.1 真庭郡八束村宮城
食樹:ヤマナラシ



エゾベニシタバ 1984.7.1 八束村宮城
食樹:ヤマナラシ



オオシロシタバ 2011.8.27 苫田郡鏡野町恩原高原
(黒田健二氏採集)



オニベニシタバ 1984.5.28 岡山市金山
食樹:アベマキ



オニベニシタバ 1984.7.28 岡山県備中町布賀



オニベニシタバ 1984.8.25 岡山県八束村塩釜



カバフキシタバ 1984.5.28 岡山市金山
食樹:カマツカ



カバフキシタバ 1984.7.11 岡山市金山



カバフキシタバ 2011.7.8 岡山市竹原三徳園



キシタバ 1984.5.27 赤磐郡赤坂町山口
食樹:ヤマフジ



キシタバ 1984.7.8 岡山市牟佐



キシタバ 1984.7.17 御津郡建部町入野



クロシオキシタバ 1984.5.22 岡山市久々井
食樹:ウバメガシ



クロシオキシタバ 1984.5.22 岡山市久々井
食樹:ウバメガシ



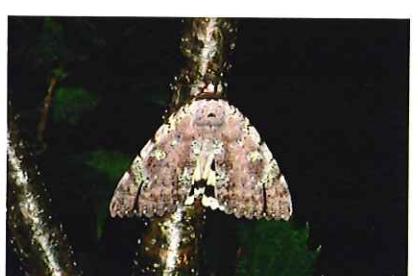
クロシオキシタバ 1984.8.7 岡山市西大寺水門宮山



コガタキシタバ 1984.5.20 岡山市四御神 食樹:アベマキ
コガタキシタバ 1984.6.21 邑久郡邑久町上寺山
コガタキシタバ 1984.6.29 岡山市牟佐



コシロシタバ 1984.5.22 岡山市操山 食樹:アベマキ
コシロシタバ 1984.5.22 岡山市操山 食樹:アベマキ
コシロシタバ 2011.7.24 岡山市東区広谷芥子山



ゴマシオキシタバ 1984.9.1 奥津町森林公園
ジョナスキシタバ 1984.9.1 奥津町森林公園
シロシタバ 2011.8.27 鏡野町恩原高原



ナマリキシタバ 1984.5.19 成羽町木之村 食樹:イブキシモツケ (自然光)
ナマリキシタバ 1984.5.19 成羽町木之村 食樹:イブキシモツケ (ストロボ)
幼虫探索中の那須敏氏 1984.5.13 成羽町木之村



ナマリキシタバ 1984.7.28 備中町布賀
ナマリキシタバ 1984.7.28 備中町布賀
ヒメシロシタバ 2005.9.4 上齋原村恩原高原



フシキキシタバ 1984.5.9 邑久町上寺山
食樹:アベマキ



フシキキシタバ 1984.5.9 邑久町上寺山
食樹:アベマキ



アベマキを叩く那須敏氏 1984.5.9 邑久町上寺山



フシキキシタバ 1984.6.21 邑久町上寺山



フシキキシタバ 2011.6.25 岡山市東区芥子山



フシキキシタバ 2011.6.28 岡山市東区芥子山



ベニシタバ 1984.6.14 阿波村大高下
食樹:オノエヤナギ



ベニシタバ 1984.6.14 阿波村大高下
食樹:オノエヤナギ



ベニシタバ 1984.8.18 八束村塩釜



マメキシタバ 1984.8.25 真庭郡八束村塩釜



ムラサキシタバ 2008.9.30 鏡野町恩原高原



ヨシノキシタバ 1984.9.5 奥津町森林公園



ワモンキシタバ 1984.5.18 吉井町広戸
食樹:サクラの一種



ワモンキシタバ 1984.5.18 吉井町広戸
食樹:サクラの一種



ワモンキシタバ 1984.6.10 邑久町上寺山

「山口県の昆虫類レッドリスト2011」における鱗翅目の選定について

後藤和夫*・川元 裕・中西 淳(山口県)

2002年度に発行した山口県のレッドデータブックは、2000年度までの調査結果が基のもので発行から既に10年が経過している。当然昆虫類の動向は同好者が大きく関わり、その後の解明には「山口むしの会」を中心となって活動し、新たに多くのデータの蓄積が図られ実状も変化してきた。既存のRDBの不備な箇所も当時から指摘されており、会発足から10年の節目となり、これから主導的役割は昆虫の判る専門集団である同好会が果たすことが、現在の社会に必要なことで今回の選定作業に至った。

出版にあたっては行政機関には事前に説明し、選定の区分(カテゴリー)は整合性を考えて環境省の基準を遵守し、県などから発行されたものに準じているが、基本的には会独自の編集構成とし、一般の方にも親しみやすく図鑑形式で最新の知見から考察しましたものである。

蛾類の選定種

2002年度に発行された山口県のレッドデータブックの掲載種も再度見直し、新たに種の選定にあたった結果、別紙の通り15種を選定した。

山地から海岸(瀬戸内海と日本海)と多様な環境をもつ山口県の特質を考慮し、山地、草原地、低地、湿地、汽水域に区域ごとに生息する稀少種に該当すると思われる種をデータから選出することで、区分けにあたった。今回の選定で注目すべき種として他県では稀少種に該当しないサツマニシキを絶滅危惧Ⅱ類に選んだこと、選定種15種の内、7種は秋吉台に生息している種になるが、多くは情報不足として選定することに留まった。

サツマニシキの幼虫の食餌植物であるヤマモガシは局所的に少数の自生であるため、伐採により直ちに絶滅に至る危険性があることが、選定理由である。候補種の多くが秋吉台に生息するのは、カルスト台地という特異な環境で広大な草原部とそれをとり囲む山林部を持つ特殊な地形になる。この環境が稀少となる種の生息地になっているなど、何らかの理由があると考えられ、これからの調査研究課題である。

蝶類の選定種

蛾類同様多様な生息環境から絶滅したと判断した3種と、絶滅危惧種33種を選定した。

「RDBやまぐち2002」と比較し新たに5種が追加されたが、内訳を見るとセセリチョウ科7、アゲハチョウ科1、シロチョウ科2、シジミチョウ科13、タテハチョウ科10の33種である。

このなかで、前回の情報不足種から新たなカテゴリーに加わった種にミヤマチャバネセセリ、ミヤマカラスシジミ、カラスシジミ、ウラギンヒョウモンがある。そのほかクモガタヒョウモン、オオウラギンスジヒョウモンとウスイロオナガシジミ、ウラクロシジミ、ハヤシミドリシジミ、スギタニルリシジミは新規に選定された種になる。

ランク別に見ると絶滅危惧IA類が8種とクロシジミとクロツバメシジミ、カラスシジミがランクアップされ、IB類が8種でキバネセセリとミヤマチャバネセセリ、ギフチョウ、ウラギンスジヒョウモンがランクアップされた。絶滅危惧Ⅱ類が8種でミヤマカラスシジミとホシミスジがランクアップされ、クモガタヒョウモンが新たに加わった。準絶滅危惧種は9種でスギタニルリシジミとオオウラギンスジヒョウモンが新たに加わり、ウラギンヒョウモンが情報不足からランクアップされ、ウラナミジャノメは絶滅危惧Ⅱ類からランクダウンしたものである。

選定種の中で最も絶滅が懸念されるIA類としてまずホシチャバネセセリとコキマダラセセリ、ヒメシジミがある。続いて全国的に注目されるギフチョウやオオウラギンヒョウモンに加え、地味な種となるヘリグロチャバネセセリやキバネセセリ、ギンイチモンジセセリ、ミヤマチャバネセセリ、クロツバメシジミ、クロヒカゲモドキなど注意深く見守る種も多い。

草原性の蝶となるヒョウモン類は県内でも減少の度合いは強く年々加速されており、この傾向はセセリチョウ類にも該当する種が多い。環境の遷移とともに絶滅に瀕する種がある反面、採集圧による種も無くもなく、ギフチョウに代表されるように既に採集する様な次元ではなく、保全の領域に入った種もあることで、良識のある同好諸氏の行動が強く求められる。

蝶類の爱好者はどこの県も多いが、偏った調査に終始する傾向は未だに強く、絶滅する前に未調査地の開拓を早急に行うことが、これから保全にもっとも効果的であると考えられる。

参考文献

山口むしの会稀少昆虫類選定委員会、2011. 山口県の昆虫類レッドリスト2011. 198pp., 山口むしの会.

蛾類選定種 15種

サツマニシキ <i>Erasmia pulchella</i>	絶滅危惧 II 類
オキナワルリチラシ <i>Eterusia aeedea</i>	絶滅危惧 II 類
フチグロトゲエダシャク <i>Nyssiodes lefuerius</i>	絶滅危惧 II 類
アキヨシヒゲナガ <i>Nemophora smaragdaspis</i>	情報不足
オオミノガ <i>Eumeta variegata</i>	情報不足
エンスイミズメイガ <i>Eristena argentata</i>	情報不足
シロオビフユシャク <i>Alsophila japonensis</i>	情報不足
アキヨシトガリエダシャク <i>Hypoxystis pulcheraria</i>	情報不足
フジキオビ <i>Schistomitra funeralis</i>	情報不足
カバイロシャチホコ <i>Ramesa tosta</i>	情報不足
スグドクガ <i>Laelia coenosia</i>	情報不足
マエアカヒトリ <i>Aloa lactinea</i>	情報不足
ダイセンセダカモクメ <i>Cucullia mandschuriae</i>	情報不足
ギンモンセダカモクメ <i>Cucullia jankowskii</i>	情報不足
アオモンギンセダカモクメ <i>Cucullia argentea</i>	情報不足

蝶類絶滅種 3種 選定種 33種

ミドリシジミ <i>Neozephyrus japonicus</i> (Murray)	絶滅
ヒヨウモンモドキ <i>Melitaea scotosia</i> Butler	絶滅
ヒメヒカゲ <i>Coenonympha oedippus</i> (Fabricius)	絶滅
ホシチャバネセセリ <i>Aeromachus inachus</i> (Ménétriès)	絶滅危惧 I A 類
コキマダラセセリ <i>Ochlodes venatus</i> (Bremer & Grey)	絶滅危惧 I A 類
カシワアカシジミ <i>Japonica onoi</i> Murayama	絶滅危惧 I A 類
クロシジミ <i>Niphanda fusca</i> (Bremer & Grey)	絶滅危惧 I A 類
カラスシジミ <i>Fixsenia w-album</i> (Knoch)	絶滅危惧 I A 類
ヒメシジミ <i>Plebejus argus</i> (Linnaeus)	絶滅危惧 I A 類
クロツバメシジミ <i>Tongeia fischeri</i> (Eversmann)	絶滅危惧 I A 類
オオウラギンヒヨウモン <i>Fabriciana nerippe</i> (C. & R. Felder)	絶滅危惧 I A 類
キバネセセリ <i>Burara aquilina</i> (Speyer)	絶滅危惧 I B 類
ヘリグロチャバネセセリ <i>Thymelicus sylvaticus</i> (Bremer)	絶滅危惧 I B 類
ミヤマチャバネセセリ <i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)	絶滅危惧 I B 類
ギフチョウ <i>Luehdorfia japonica</i> Leech	絶滅危惧 I B 類
ツマグロキチョウ <i>Eurema laeta</i> (Boisduval)	絶滅危惧 I B 類
ウスイロオナガシジミ <i>Antigius butleri</i> (Fenton)	絶滅危惧 I B 類
ウラギンスジヒヨウモン <i>Argyronome laodice</i> (Pallas)	絶滅危惧 I B 類
クロヒカゲモドキ <i>Lethe marginalis</i> (Motschulsky)	絶滅危惧 I B 類
ギンイチモンジセセリ <i>Leptalina unicolor</i> (Bremer & Grey)	絶滅危惧 II 類
スジグロチャバネセセリ <i>Thymelicus leoninus</i> (Butler)	絶滅危惧 II 類
ルーミスシジミ <i>Panchala ganesa</i> (Moore)	絶滅危惧 II 類
ミヤマカラスシジミ <i>Fixsenia mera</i> (Janson)	絶滅危惧 II 類
シルビアシジミ <i>Zizina emelina</i> (Fabricius)	絶滅危惧 II 類
クモガタヒヨウモン <i>Nephargynnis anadyomene</i> (C. & R. Felder)	絶滅危惧 II 類
ホシミスジ <i>Neptis pryeri</i> Butler	絶滅危惧 II 類
オオヒカゲ <i>Ninguta schrenckii</i> (Ménétriès)	絶滅危惧 II 類
スジボソヤマキチョウ <i>Gonepteryx aspasia</i> (Ménétriès)	準絶滅危惧
ウラクロシジミ <i>Iratsume orsedice</i> (Butler)	準絶滅危惧
ウラキンシジミ <i>Ussuriana stygiana</i> (Butler)	準絶滅危惧
ハヤシミドリシジミ <i>Favonius ultramarinus</i> (Fixsen)	準絶滅危惧
スギタニルリシジミ <i>Celastrina sugitanii</i> (Matsumura)	準絶滅危惧
オオウラギンスジヒヨウモン <i>Argyronome ruslana</i> (Motschulsky)	準絶滅危惧
ウラギンヒヨウモン <i>Fabriciana adippe</i> (Denis & Schiffermüller)	準絶滅危惧
オオムラサキ <i>Sasakia charonda</i> (Hewitson)	準絶滅危惧
ウラナミジヤノメ <i>Ypthima multistriata</i> Butler	準絶滅危惧

山口県南西部におけるフチグロトゲエダシャクの記録と生態

渡辺一雄*・管 哲郎・後藤和夫・岡村元昭・中西 淳

山口県のフチグロトゲエダシャクは、2007年、後藤(月刊むし439,2007)によって宇部市ではじめて採集された。以来、連続的に採集されているがその産出状況(パターン)はいさか奇異である。2008年以来2011年までの調査状況と出てきた問題点などをまとめて報告した。

なお、詳細は山口むしの会会報『山口のむし』に報告した(渡辺・中西・後藤・管・岡村,2012)。ここでは、当日の発表の要点を列挙する。

まずはなにより『分布実態の解明』が先決。採集、観察とご発表を！

1. フチグロトゲエダシャクとは

*分布:(国内)北海道、礼文島、利尻島、本州、四国、九州;(国外)シベリア、中国

(地域別)北海道、東北、関東、中部地方以外は点の記録(準絶滅危惧種の県が多)

(県別)千葉県、神奈川県、東京都、山口県、高知県、熊本県、(最近、兵庫県)

*食草:マメ科、バラ科、タデ科など各種

*年一化、早春のみ出現。♂は昼行性、♀は無翅とされる。

*山口県での発見史――

①後藤和夫、2007.2.21.2♂宇部市、2.22.山陽小野田市 1♂

②以後、直径約10km圏内で点々と。2008年4月中西淳が♀を発見。

③今年の初見記録:2011.2.5.後藤 1♂目撃(朝は車窓氷結の厳寒日、最高気温12℃)

④2月中旬から3月中旬が最盛期? 渡辺(広島)は2008年から毎年数回の宇部参り。

⑤宇部市から山陽小野田市の直径10kmの外からは現在のところ発見されていない。

2. 発表の骨子---観察事項と注目点、考えたこと

「分布の広がり方の実態」が最大の謎---観察と仮説の修正を重ね本質に迫りたい。

*成虫の生活実態(♂の飛翔とねぐら、♀の行動、交尾と産卵、幼虫と蛹の行動)は?

*特異な初令幼虫行動(先端から吐糸で垂下、親水性、耐飢性)⇒春風に乗り大陸から黄砂と共に飛来する可能性はあるか?

*この場合、着地・増幅クローン個体群が核⇒複数の小メタ個体群分布圈形成⇒消長は?

(1)成虫の生活

(♂の飛翔)

① 朝9時頃から3時頃まで。15℃以上で活発化。

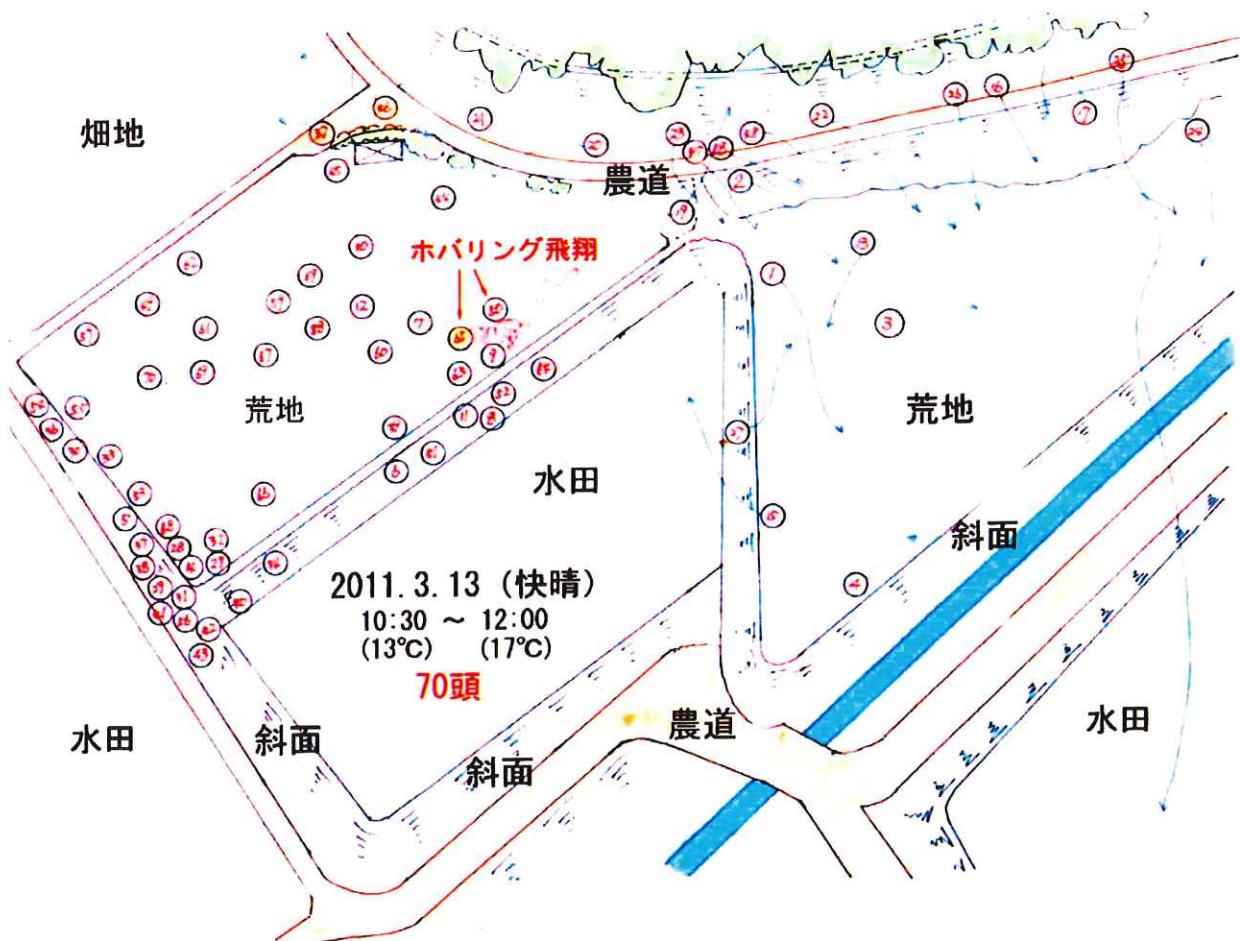
② 以下のA~Cの三類型に区分が可能?(A類型)地上2m付近を猛スピードで飛ぶ場合、(B類型)2~5mの小移動の場合、(C類型)谷渡りの場合

③ 飛翔敏感。静止中の発見か居合抜き以外は採集困難。

④ ♀がいると飛翔緩慢化⇒草間に降下の場合、凄い保護色。のべ数十頭の目撃の翌日、快晴 15℃で目撃ゼロの日あり。翌日は再度50頭目撃⇒当日の飛翔の可否を決める『未知の条件』が伏在する。



多数の成虫の飛翔が観察された宇部市末信。2011年12月23日、後藤和夫撮影



宇部市末信の調査地におけるフチグロトゲエダシャク♂個体の出現状態の一例

2011年3月13日、10:30-12:00、観察者：管哲郎

丸印の中の数字は観察開始後の本種の出現順序で、述べ数(同一個体の複数回カウントを含む)。視認によって、北側斜面(上部)から降下する個体が多いことが歴然で、ほとんどが左側荒地に集まつた。一人の観察者による観察可能な飛翔状況を図像化したものである。

(飛翔空間の共通点)

関東地方では河川敷。当地でも河川敷の産地が一ヵ所。あとは斜面、谷を控えた休耕畑か道路わきの荒れ地⇒共通点は草刈りなしで放置の 70cm～2m の冬枯れ植物が密に生えた荒地“平原”。

(ねぐら?)

観察地 A では、朝は北側の竹の多い雑木林斜面から荒れ地に降下⇒活動⇒夕刻に高所を一直線に飛翔してこの林に入りこむ個体も数回目撲。この林は“ねぐら”?

シベリアや河川敷には斜面の林はなく別の夜の過ごし方を考える必要。夜間の摂餌は?

(2)交尾と産卵

- ① 朝から午後まで。お昼前後の場合が圧倒的に多い。
- ② 多回交尾が常態かも。
- ③ 産卵管を枯れた単子葉植物の巻いた間隙に差しこみ数 10 個～数百個の卵塊。
- ④ 卵塊は黄色。孵化前に黒変する。表面が窪んだ卵が多いが孵化前には丸く整形される。

(3)幼虫の習性

(初令幼虫の仮死行動と吐糸ぶら下がり行動)

- ① 孵化後、餌に食いつく個体の他、数日間ほとんど摂食せずシャーレの底に横たわりときに表面張力下に水没して仮死状に見える個体がある。死んでおらず数日後に活動開始するようだ。従って成長率の個体差は激甚となる。
- ② 葉先やシャーレのふたの下面に登り定位、ときに集結。重力に負の移動である。
- ③ 吐糸性が初令当初から強くすぐ下がる。黄砂などに乗った『蜘蛛の雪迎え』的な大陸間移動も?

(2, 3 令時の擬態行動)

- ① カラスノエンドウの葉先の巻き葉そっくりの静止姿勢。
- ② 葉先の下で半身を直線状にして「葉(芽)のまね」でも静止。
- ③ 二対の尾脚は強壯で運動性顕著。水没仮死の性質は終令まで残る?
- ④ 体に「黒いシミ」を不規則に装う個体が多い。病気を装う?

(4)蛹の習性

(蛹化場所)

地下 3cm 位までの土中が原則。木の枝下の地表に半身露出のケースあり。

(蛹表面と土との間隙形成)

- ① 脱皮後、蛹と土との間に 1～2mm 程度の間隙(ギャップ)が生じるようだ。蛹化後に前蛹や蛹が『全身を震わせる』ことによって生じるらしい?
- ② この間隙内の空気の化学組成、蛹表面の化学組成は感染症防除等の観点から重要。
- ③ 蛹のアンテナ鞘表面から櫛ひげが認められる。これは♂の蛹?
- ④ 脱皮不全(前蛹状態)のまま硬化する個体が相当数認められる。これが何かは不明。

(以上)

編者注:本号編集中に「山口のむし」第 11 号が発行された(2012 年 3 月 30 日付け)。

渡辺一雄・中西 淳・後藤和夫・管 哲郎・岡村元昭(2012)フチグロトゲエダシャク-山口県南西部における記録と生態. 山口のむし, (11): 57-71.

後藤和夫(2012)フチグロトゲエダシャクの追加記録(2011). 山口のむし, (11): 74.



フチグロトゲエダシャク♂, 2012年2月23日,

宇都市末信, 後藤和夫撮影



♂正面, 2012年2月29日, 山陽小野田市, 後藤和夫撮影



前脚を持ち上げている♂

宇都市末信 2011年3月5日, 管哲郎撮影



♀は翅を欠く(ブッシュの内部の枯れ草に静止).

宇都市末信, 2009年2月26日, 後藤和夫撮影



交尾中の雌雄

宇都市末信, 2009年2月26日 14:20, 後藤和夫撮影



別の交尾中の雌雄。

宇都市末信, 2011年2月24日, 管哲郎撮影

すぐ右脇のススキの陰でホバリングしている♂の頭部と尾端が見える。

冠高原のミナミアカシジミについて

神垣 健司(広島県)

ミナミアカシジミ *Japonica onoi mizobei* の分布調査の結果を報告した。

・広島県廿日市市吉和・冠高原

現在、国内で唯一、ミナミアカシジミの分布地で、高原内はカシワ・クヌギ・ミズナラなどの混交林、近縁種のアカシジミも同所に分布しています。

・広島県山県郡北広島町掛頭山

山頂（標高 1126m）にカシワの群落がある。強い風の影響で高さ 1m ほどの低木、ここでは未だにアカシジミ属を確認していない。

・広島県山県郡安芸太田町深入山

深入山のラベルが付いたミナミアカシジミ♂の標本が現存するが、産地ミスの可能性もある。現在、深入山ではわずかにカシワの小木があるのみで、本種の生息はほぼ不可能である。

・島根県大田市三瓶山

三瓶山塊の中心にあたる火口部（室の内）にカシワの群落があり、数回調査を行ったが、生息は確認できなかった。

・岡山県苫田郡鏡野町・恩原高原

恩原高原で採集されたアカシジミ♂の交尾器を多数検鏡したが、すべてアカシジ *Japonica lutea* であった。

・韓国

北西部の京畿道近郊を中心に探索したが、未だにミナミアカシジミは確認していない。また、韓国内に大規模なカシワ林があるという情報もあるが、場所を特定できていない。

・ロシア・沿海州

ガモフ半島のカシワ林で発生しているのは、交尾器を検鏡した結果、キタアカシジミではなくミナミアカシジミであった。形態もミナミアカシジミにきわめてよく似ている。

今後、中国地方や韓国などで、ミナミアカシジミの新たな産地を探してみたい。

関連文献

Saigusa T. (1993) A study on new subspecies of the Tribe Theclini (Lepidoptera, Lycaenidae), *Zephyrus Researchers*, (1) : 12-22.

神垣健司 (1994) アカシジミ亜属 *Yuhbae*に関する最近の知見－広島県のキタアカシジミ(3). 西風通信, (6): 2-10.



ミナミアカシジミ♂

冠高原(広島県)

2003 年 6 月 28 日



冠高原(2008年7月26日)



深入山(2009年10月18日)



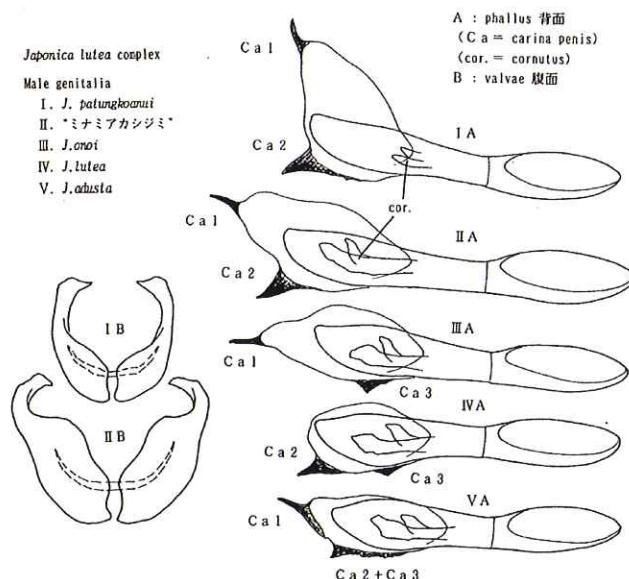
ミナミアカシジミ卵(冠高原, 2001年4月1日)



ミナミアカシジミ終齢幼虫(冠高原, 2002年5月5日)



ミナミアカシジミ♀冠高原 2003年6月28日



アカシジミ属交尾器



ロシア・ミナミアカシジミ(表面)



ロシア・ミナミアカシジミ(裏面)

インドネシア・ビリトン島のアリノスシジミ

淀江賢一郎(島根県)

2005年12月25日～12月30日、インドネシア・ビリトン島に怪蝶アリノスシジミの探索に出かけた。案内してくれたのは西山保典氏(木曜社)。青森の工藤忠氏と同行した。そのときの模様を紹介する。またこの旅の前後にシンガポールのセントーサ・バタフライパーク、スラウェシのパンチムルグ(ウォレスゆかりのチョウの谷)、バリ島のトリバネアゲハ増殖場、ジャワ島のボゴール植物園なども訪問した。それらもあわせ紹介する。ビリトンは実にのんびりとしたところ。チョウは多いし、ごはんも美味く、人もよいパラダイスのような心地よいアジアの田舎だった。観察に成功し、ゆったりとした時間を共有した西山さん、工藤さんにお礼申し上げます。





中国地方 5 県のチョウ類レッドデータ・リスト一覧

淀江賢一郎(島根県)・三宅誠治(岡山県)・神垣健司(広島県)

はじめに

環境庁が最初に日本版レッドデータ・リストを作成したのが 1991 年のこと。チョウの部は白水隆先生の執筆だった。生息地が狭まり個体数も減少を続けているチョウ類を、絶滅危惧種、危急種、希少種とランク付けしたことも斬新だったし、まずは誰にもわかりやすかった。アマチュア同好者のチョウの採集と標本作り、記録報告が「モニタリング調査」として位置づけられたのも我が意を得たように誇らしかった。なぜかウスイロヒヨウモンモドキが入っておらず、どう解釈したものか悩んだこともなつかしい(のち、白水先生にこのことを直接お尋ねしたことがあるが、「当然入れるべき種だったが、うっかりしてしまった」とのこと)。

1993 年には、日本鱗翅学会が「都道府県別レッドデータ・リスト」を編んだ。これはその後、各県で続々とレッドデータブックが出版されたことなど行政の動きを見れば先見性の高い画期的な事業であったといえるだろう。柴谷篤弘先生の慧眼である。2012 年現在では、環境省が 3 回、鱗翅学会が 3 回、各都道府県が 2~3 回程度の改定を重ねてきており、信頼性も重要性も一段と増してきたように思われる。

本稿では、この 20 年余に発行されたこれらのすべてのリストを一覧にして、リストへの追加、ランク変更などを中国 5 県について一目で見てみよう試みたものである。この話は、昨秋広島で開かれた中国支部例会の後の懇親会で 3 人の評議員が集まって雑談しているとき、3 人でなにかまとめてみませんか? という思いつきから始まった。評議員が集まって話し合うなどということは中国地方では地理的になかなか難しいのだが、いまはメールでやりとりができるのでとりあえずたたき台が出来上がった。まだ公開するには躊躇いを感じるが、何か役に立つこともあるのではないかと思いここに発表することにした。会員諸氏からのご指摘をいただき、より利用しやすくしていくことができればさいわいである。

カテゴリー区分およびランク判定規準

レッドリストは絶滅のおそれのある種をリストし、ランク判定規準に基づき絶滅の危険度を評価しカテゴリー区分したものである。この基準は今までたびたび見直されているので整理しておく。

環境庁(1991):「日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—(無脊椎動物編)」環境庁野生生物課編集、(財)日本野生生物研究センター発行。1991 年 8 月。

「絶滅種(EX)」: 我が国ではすでに絶滅したと考えられる種または亜種。

「絶滅危惧種(E)」: 絶滅の危機に瀕している種または亜種。もしも現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用するならば、その存続は困難なもの。

「危急種(V)」: 絶滅の危険が増大している種または亜種。もしも現在の状況をもたらした圧迫要因が引き続き作用するならば、近い将来「絶滅危惧種」のランクに移行することが確実と考えられるもの。

「希少種(R)」: 存続基盤が脆弱な種または亜種。現在のところ(E)にも(V)にも該当しないが、生息条件の変化によって容易に上位のランクに移行するような要素(脆弱性)を有するもの。

チョウの部の執筆者は白水隆。

環境省(2000):2000 年に WEB 上でレッドリスト公表。レッドデータブックとして出版されたのは 2006 年。「改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物・昆蟲類」、環境省自然環境野生生物課編集、(財)自然環境研究センター発行。2006 年 8 月。

1997 年、環境庁は、IUCN(国際自然保護連合、1994)のレッドリストカテゴリー改定に伴い、今までの「定性的要件」による評価だけでなく、「定量的要件(数値基準)」を併用し、数値基準に基づいて評価することが可能な種については「定量的要件」を適用することとした。定性的要件と定量的要件は必ずしも厳密な対応関係にあるわけではないが、現時点では併用が最善との結論に至ったものである。

定量的要件は、個体群の減少率、生息地の縮小率、成熟個体群の絶対数などで判定する。2000 年のレッドリストでは種の選定とランク付けにあたり定量的基準も考慮しながら、全体としては基本的に定性的基準に従って選定している。日本のチョウ類でこのような数量解析ができる種はいまのところないと思われる。

また、カテゴリー区分も「絶滅危惧 I 類(CR+EN)」が「絶滅危惧 IA 類(CR)」と「絶滅危惧 IB 類(EN)」に細分化された。

「絶滅(EX)」: 我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

「野生絶滅(EW)」: 飼育・栽培下でのみ存続している種

「絶滅危惧 I 類(CR+EN)」: 絶滅の危機に瀕している種

○「絶滅危惧 IA類(CR)」:ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

○「絶滅危惧 IB類(EN)」:IA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種

「絶滅危惧 II類(VU)」:絶滅の危険が増大している種

「準絶滅危惧(NT)」:現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

「情報不足(DD)」:評価するだけの情報が不足している種

付属資料「絶滅のおそれのある地域個体群(LP)」:地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群。

チョウの部の執筆は藤井恒・中村康弘。

環境省(2007):2007年にWEB上でレッドリスト公表。レッドデータブックは未公刊。

環境省(2000)と同様で、定量判定と定性判定がある。定性判定は次のとおり。

「絶滅(EX)」:我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

「絶滅危惧 I類(CR+EN)」:絶滅の危機に瀕している種

○「絶滅危惧 IA類(CR)」:ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

○「絶滅危惧 IB類(EN)」:IA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種

「絶滅危惧 II類(VU)」:絶滅の危険が増大している種

「準絶滅危惧(NT)」:現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

「情報不足(DD)」:評価するだけの情報が不足している種

付属資料「絶滅のおそれのある地域個体群(LP)」:地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。

チョウの部の執筆は藤井恒・中村康弘。

鱗翅学会(1993):日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(1992年)。「日本産蝶類の衰亡と保護第2集」:17-81. 矢田脩・上田恭一郎編、日本鱗翅学会(財)日本自然保護協会発行。1993年11月。

「絶滅種(EX)」:該当する都道府県では、すでに絶滅したと考えられる種または亜種(例えば、①過去50年間以上生息の情報が得られていない種、②信頼できる定期調査にも関わらず、20年間以上未確認の種など)。

「絶滅危惧種(E)」:該当する都道府県内では、絶滅の危機に瀕している種または亜種。①それほど遠くない過去(20~50年)に、該当する都道府県で生息記録はあるが、その後信頼すべき調査がないため、絶滅したかどうか判断できないもの、②既知のすべての個体群で個体数が危機的水準にまで減少している種、③既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している種、④既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲圧にさらされている種。

「危急種(V)」:該当する都道府県内では、絶滅の危険が増大している種または亜種。現状のままでは、近い将来絶滅危惧種に入れられる種、開発などの環境の変化により、個体群の多くがその個体数を減少しつつある種。

「希少種(R)」:該当する都道府県内では、存在基盤が脆弱な種または亜種。もともと分布域が狭く、局所的で、個体数の少ない稀種。現在は個体数は減少していないが、ついに絶滅危惧種、危急種になる危険性のある種。

執筆者は、鳥取県:淀江賢一郎・竹内亮・田村昭夫・中井博喜・安田達史。島根県:淀江賢一郎・和泉浩行・佐々木保。岡山県:難波通孝・伊藤國彦・三宅誠治。広島県:梅原務。山口県:三時輝久・後藤和夫・林直哉・小西寛・三好和雄・岡耿一郎・大木孝行・佐々木克己・田中正文。

(注記)このとき「島根県」は、本土とは別に「隠岐諸島」という地域区分を入れて別途ランク付けした(執筆:淀江)。これは意義あることだと思っていたが、のち、離島といえども都道府県一括して論じるように、という方針が編集者から示され、以降のレッドリスト作成では隠岐諸島だけでは作成していない。今回の整理にあたっては、隠岐諸島でのランクも考慮したうえで、島根県一括にまとめ直している。

鱗翅学会(2003):日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年)。「日本産蝶類の衰亡と保護第5集」:1-169. 巢瀬司・枝恵太郎編、日本鱗翅学会発行。2003年7月。

環境省(2000)の新たな「定量的要件」の併用に伴い、鱗翅学会でも「定性判定」に加え「定量判定」を適用することになった。

ランク判定にあたっては、まず「絶滅」「野生絶滅」しているか否かを判定する。つぎに、現在も分布しているものについて定量判定あるいは定性判定を行う。

定量判定にあたっては、環境省(2000)の基準のままで数量解析できないことから、次のような基準を策定した。まず広域分布をしていたか、狭域分布していたかを判定し、前者は生息市町村数(平成の大合併前)の減少率で、後者は生息範囲・発生地数の減少率からランクを決定する。その比較のための基準年は1950年ごろとしている。この定量判定の導入はいまだチョウ屋さんの間にはよく知られていないようだが、画期的な改革だったといえるだろう。

定性判定は次のとおり。

「絶滅危惧 I類(EN)」:個体数がすべての産地で危機的水準にまで減少している。生息環境が既知のすべての産地で著しく悪化している。捕獲・採集が既知のすべての産地で再生産能力を上回る圧力がある。

「絶滅危惧 II 類(VU)」:個体数が大部分の産地で大幅に減少している。生息環境が大部分の産地で明らかに悪化している。捕獲・採集が大部分の産地で再生産能力を上回る圧力がある。

「準絶滅危惧(NT)」:個体数が一部の産地において顕著な減少がみられる。生息環境が一部の産地において顕著な悪化がある。捕獲・採集が一部の産地において顕著な影響を及ぼしている。

「情報不足(DD)」:生息状況が未詳だが、十分な生息情報が得られれば絶滅の恐れがあると判定される可能性が大きい種。

執筆者は、鳥取県:田村昭夫・三島寿雄・生田敬。島根県:淀江賢一郎。岡山県:三宅誠治・難波通孝。広島県:神垣健司。山口県:後藤和夫・棕木博昭。

鱗翅学会(2009):日本産蝶類都道府県別レッドリスト(三訂版). 「日本産チョウ類の衰亡と保護第6集」: 107-246. 間野隆裕・藤井恒編, 日本鱗翅学会発行。2009年12月。

規準と判定方法は、鱗翅学会(2003)と同じで定量判定を適用。

執筆者は、鳥取県:田村昭夫・三島寿雄・生田敬。島根県:淀江賢一郎。岡山県:伊藤國彦・難波通孝・黒田健二。広島県:神垣健司。山口県:後藤和夫・川元裕。

鳥取県(2002):「レッドデータブックとつり—鳥取県の絶滅の恐れのある野生動植物」, 鳥取県生活環境部環境政策課発行, 鳥取県自然環境調査研究会編。2002年3月。

「絶滅(EX)」:鳥取県では既に絶滅したと考えられる種。

「野生絶滅(EW)」:野生では絶滅し、飼育下でのみ存続している種。

「絶滅危惧 I 類(CR+EN)」:絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。

「絶滅危惧 II 類(VU)」:絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。

「準絶滅危惧(NT)」:存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度が小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

「情報不足(DD)」:評価するだけの情報が不足している種。

「その他の保護上重要な種(OT)」:鳥取県の地理的な自然特性等から保護上重要度の高い種。

チョウの部の執筆者は、小林一彦・三島寿雄・松田裕一・淀江賢一郎・田村昭夫・門脇久志・坂田国嗣・國本洸紀・長谷川寿一。

島根県(1997):「しまねレッドデータブック—島根県の保護上重要な野生動植物」, 島根県環境生活部景観自然課編集・発行。1997年3月。

「緊急保護種」:このままでは絶滅の恐れのあるもので、もっとも緊急かつ厳重な保護対策を必要とする種(島根県として緊急に保護すべき種)

「要保護種」:人為影響等の圧迫要因により生息状況が悪化し、このままでは緊急保護種に移行する可能性が高く、保護対策の必要がある種(島根県として出来うる限り保護すべき種)

「要注意種」:もともと個体数が少ない種や最近減少が著しい種(身近な環境に普通に見られたが、最近見られなくなった種を含む)で、ただちに絶滅を危惧することはないが、特に注意を払っていく必要がある種(状況を注意深く見守っていく種)。

チョウの部の執筆者は、ミスジチョウ・クロヒカゲモドキ・キバネセセリ・ホシチャバネセセリは淀江賢一郎・佐々木保共著、他の種は淀江賢一郎。

島根県(2004):「改定しまねレッドデータブック—島根県の絶滅のおそれのある野生動植物」, 島根県環境生活部景観自然課発行、ホシザキグリーン財団編集。2004年3月。

「絶滅(EX)」:本県では既に絶滅したと考えられる種。

「野生絶滅(EW)」:飼育・栽培下でのみ存続している種。

「絶滅危惧 I 類(CR+EN)」:絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。

「絶滅危惧 II 類(VU)」:絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。

「準絶滅危惧(NT)」:存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

「情報不足(DD)」:評価するだけの情報が不足している種。

チョウの部の執筆者は、ウスイロヒヨウモンモドキが中蘭洋行・星川和夫共著、他の種はすべて淀江賢一郎・坂田国嗣共著。

岡山県(2003):「岡山県版レッドデータブック—絶滅のおそれのある野生生物」, 岡山県生活環境部自然保護課制作、(財)岡山県環境保全事業団発行。2003年3月。

「絶滅種」:すでに絶滅したと考えられる種。

「野生絶滅種」:飼育・栽培下のみで存在している種。

「絶滅危惧種」:絶滅の危機に瀕している種。もしも、現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用するならば、その存続が困難になるもの。

「危急種」:絶滅の危険が増大している種。もしも、現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用するならば、近い将来「絶滅危惧種」のランクに移行することが確実と考えられるもの。

「準危急種」:存続基盤が脆弱な種。現在のところ、「絶滅危惧種」にも「危急種」にも該当しないが、生息・生育条件の変化によって容易に上位のランクに移行するような要素(脆弱性)を有するもの。

「情報不足」:評価するだけの情報が不足している種。

「希少種」:種として元々の個体数を考慮する種。現在急激に個体数が減ってきてている種ではないが、元々個体数が少ないという特徴がある種。

「留意種」:絶滅のおそれはないが、岡山県として記録しておく必要があると考えられる種。優れた環境の指標となる種、岡山県の特産種、岡山県が分布の限界となっている種。その他岡山県として記録しておく必要があると考えられる種。

昆虫分科会のメンバーは表示されているが、チョウの執筆者名は表記がない。

岡山県(2010):「岡山県版レッドデータブック 2009—絶滅のおそれのある野生生物」、岡山県生活環境部自然環境課制作、岡山県発行。2010年3月。

「絶滅」:すでに絶滅したと考えられる種。

「野生絶滅」:飼育・栽培下でのみ存続している種。

「絶滅危惧 I類」:絶滅の危機に瀕している種。もしも現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用するならば、その存続が困難になるもの。

「絶滅危惧 II類」:絶滅の危険が増大している種。もしも現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用するならば、近い将来「絶滅危惧 I類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。

「準絶滅危惧」:存続基盤が脆弱な種。現在のところ「絶滅危惧 I類」にも「絶滅危惧 II類」にも該当しないが、生息・生育条件の変化によって容易に上位のランクに移行するような要素(脆弱性)を有するもの。

「情報不足」:評価するだけの情報が不足している種。

「留意」:絶滅のおそれはないが、岡山県として記録しておく必要があると考えられる種。

該当種の解説執筆者は、中村具見。

広島県(1995):「広島県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックひろしま」、広島県編、広島県環境保健協会発行。1995年7月。

「絶滅危惧種」:絶滅の危機に瀕している種または亜種。

「危急種」:絶滅の危険が増大している種または亜種。

「希少種」:存続基盤が脆弱な種または亜種。

チョウ目を含む昆虫類の解説執筆者は中村慎吾。

広島県(2004):「改訂・広島県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブックひろしま 2003 -」、広島県発行、広島県版レッドデータブック見直し検討会編集。2004年3月。

「絶滅(EX)」:広島県ではすでに絶滅したと考えられる種(動物では種及び亜種、植物では種、亜種及び変種)。

「野生絶滅(EW)」:飼育・栽培下でのみ存続している種。

「絶滅危惧 I類(CR+EN)」:絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。

「絶滅危惧 II類(VU)」:絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらしている圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。

「準絶滅危惧(NT)」:存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息・生育条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

「情報不足(DD)」:評価するだけの情報が不足している種。

チョウ類執筆者は神垣健司。

山口県(2002):「レッドデータブックやまぐち—山口県の絶滅のおそれのある野生生物」、山口県野生生物保全対策検討委員会編、山口県環境生活部自然保護課発行。2002年3月。

「絶滅(EX)」:我が国ではすでに絶滅したと考えられる種。

「野生絶滅(EW)」:飼育・栽培下でのみ存続している種。

	国			鳥取県			島根県			岡山県			広島県			山口県		
	環境 府	環境 省	環境 省	鱗 翅 學 會														
	1	2	2	1	2	2	1	2	2	1	2	2	1	2	2	1	2	2
	9	0	0	9	0	0	9	0	0	9	0	0	9	0	0	9	0	0
	9	0	0	9	0	0	9	0	0	9	0	0	9	0	0	9	0	0
	1	0	7	3	2	3	9	3	7	3	4	9	3	3	9	0	2	3
ホシミスジ隱岐亞種	×	×	×	×	×	×	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
ミスジチョウ	—	—	—	3	3	—	—	3	3	4	3	4	—	—	—	—	—	3
シータテハ	—	—	—	5	6	6	6	5	—	2	5	2	5	6	6	6	5	—
ヒオドシチョウ	—	—	—	3	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アカタテハ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—
オオムラサキ	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	3	4	3	3	4	4	1	3
ウラナミジヤノメ	—	4	4	6	6	6	6	4	3	5	5	4	—	3	4	4	3	4
ヒメヒカゲ	3	5	5	5	4	4	4	3	4	4	4	4	3	5	5	5	3	6
ウラジャノメ	—	—	—	×	×	×	×	4	4	4	5	5	6	6	6	6	4	5
キマダラモドキ	—	3	3	3	4	4	5	5	—	2	2	×	3	3	3	4	4	5
オオヒカゲ	—	—	—	3	3	—	—	3	—	—	—	—	3	3	3	3	—	3
クロヒカゲモドキ	—	4	4	×	×	×	×	4	4	5	5	5	3	3	4	4	3	5
クロコノマチョウ	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミヤマセシリ	—	—	—	3	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キバネセシリ	—	—	—	5	4	5	5	5	3	2	4	2	3	4	5	5	3	4
ギンイチモンジセシリ	—	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	—	3	—	1	—	4
ホシチャバネセシリ	—	4	5	4	4	4	5	4	3	5	5	5	3	4	4	4	3	5
スジグロチャバネセシリ	—	3	3	3	3	3	3	3	—	4	2	4	—	3	—	3	—	4
ヘリグロチャバネセシリ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
コキマダラセシリ	—	—	—	3	4	4	4	4	—	5	5	5	—	3	—	—	4	5
オオチャバネセシリ	—	—	—	3	—	—	3	3	3	2	3	—	—	—	—	—	—	—
ミヤマチャバネセシリ	—	—	—	—	—	—	—	—	4	2	4	—	—	—	—	—	2	5

「×」:生息していない。

「—」:リストアップされていない。

鱗翅学会2009において、岡山県でジャコウアゲハをランク外としながらもリストに入れている。カテゴリー区分にはないが、「1」と表示する。

表2 カテゴリー区分の比較とイメージ化

イメージ	環境庁1991	環境省2000	環境省2007	鱗翅学会1993	鱗翅学会2003	鱗翅学会2009	鳥取県2002
6	絶滅種	絶滅	絶滅	絶滅種	絶滅	絶滅	絶滅
5	絶滅危惧種	絶滅危惧I類	絶滅危惧I類	絶滅危惧種	絶滅危惧I類	絶滅危惧I類	絶滅危惧I類
4	危急種	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類
3	希少種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	準絶滅危惧
2	—	情報不足	情報不足	—	情報不足	情報不足	情報不足
1	地域個体群	地域個体群	地域個体群	—	—	—	地域個体群
							重要な種

島根県1997	島根県2004	岡山県2003	岡山県2010	広島県1995	広島県2004	山口県2002	山口むしの会 2011	イメージ
—	絶滅	絶滅種	絶滅	絶滅種	絶滅	絶滅	絶滅	6
緊急保護種	絶滅危惧I類	絶滅危惧種	絶滅危惧I類	絶滅危惧種	絶滅危惧I類	絶滅危惧I類	絶滅危惧I類	5
要保護種	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	4
要注意種	準絶滅危惧	準危急種	希少種	準絶滅危惧	準絶滅危惧	準絶滅危惧	準絶滅危惧	3
—	情報不足	情報不足	情報不足	—	情報不足	情報不足	情報不足	2
—	地域個体群	—	—	—	地域個体群	地域個体群	地域個体群	1
		留意種	留意					

「絶滅」は、「野生絶滅」を含む。

「地域個体群」は、「絶滅のおそれのある地域個体群」の略。

「重要な種」は、「その他の保護上重要な種」の略。

「絶滅危惧I類」は、「絶滅危惧IA類」「絶滅危惧IB類」を含む。

「絶滅危惧 I類(CR+EN)」:絶滅の危機に瀕している種。

○「絶滅危惧 IA類(CR)」:ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。

○「絶滅危惧 IB類(EN)」:IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。

「絶滅危惧 II類(VU)」:絶滅の危険が増大している種。

「準絶滅危惧(NT)」:現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

「情報不足(DD)」:評価するだけの情報が不足している種。

付属資料「絶滅のおそれのある地域個体群(LP)」:地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。

チョウ目の執筆者は、遠藤克彦・大木孝行・後藤和夫・岡耿一郎。

山口県(2011):「山口県の昆虫類レッドリスト」山口むしの会稀少昆虫類選定委員会製作、山口むしの会発行。2011年8月。

「絶滅(EX)」:我が国ではすでに絶滅したと考えられる種。

「野生絶滅(EW)」:飼育・栽培下でのみ存続している種。

「絶滅危惧 I類(CR+EN)」:絶滅の危機に瀕している種。

○「絶滅危惧 IA類(CR)」:ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。

○「絶滅危惧 IB類(EN)」:IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。

「絶滅危惧 II類(VU)」:絶滅の危険が増大している種。

「準絶滅危惧(NT)」:現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

「情報不足(DD)」:評価するだけの情報が不足している種。

付属資料「絶滅のおそれのある地域個体群(LP)」:地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。

チョウ類の執筆者は、稻田博夫・五味清・後藤和夫・川元裕。

カテゴリー区分のイメージ化と一覧

大きな表を見たとき、漢字やアルファベットの羅列では一目で内容を把握することはできない。そこで、それぞれのカテゴリーを数字と色で置き換え、その大小と色彩で絶滅のおそれのランクをイメージ化してみることにした(表1)。カテゴリー区分はそれぞれのRDBで異なっているわけだが、本稿では表2のように単純化してみた。

おわりに

表1はシンプルであるが、意外にさまざまな情報を読み取ることができる。しかしながら本稿の目的ではないのでここではふれないとする。

なお、県版レッドデータブックは新たな改定作業が進行中で、鳥取県では2011年に原稿を締切り2012年に発行の予定。広島県は2011年に暫定リストが作られ2013年に発行の予定、島根県では2011年に暫定リスト作成、2012年に現地調査、2013年には発行予定と側聞している。

稿了後、「レッドデータブックとつり改定版」が、2012年3月30日付で発行されたので付記する。

参考文献

本文で直接引用した「レッドデータブック」以外で参考にしたものあげておく。

江原昭三・鶴崎展巨編(1993)「鳥取県のすぐれた自然(動物編)」. 327pp. 鳥取県衛生環境部自然保護課.

環境庁編(1980)「日本の重要な昆虫類・中国版」. 第2回自然環境基礎調査.

中村康弘(2010)日本のチョウ類の衰亡と保全.「日本の昆虫の衰亡と保護」: 23-35. 北隆館.

野村周平(1991)自然保護の理念と昆虫採集.「昆虫採集学」: 176-204. 九州大学出版会.

野村周平(1992)採集者の目から見た昆虫保護行政の問題点.「自然保護と昆虫研究者の役割III」: 21-25.

柴谷篤弘(1991)日本のチョウの衰亡と保護.「日本産蝶類の衰亡と保護・第1集」: 1-15.

柴谷篤弘(1993)昆虫採集から見えてくるものの評価. 蟲と自然, (2): 20-23.

島根県(1995)「島根県の貴重野生動植物リスト」. 34pp. 島根県生活環境部景観自然課.

鈴木邦雄(1989)地域生物相解明の意義と地方同好会の役割. すかしば, (32): 15-30.

矢田脩(1993)蝶の保護—モニタリングの役割.「自然保護と昆虫研究者の役割 IV」: 17-22.

山口県野生生物保全対策検討委員会編(1995)「山口県の貴重な野生生物」. 136pp. 山口県環境保健部自然保護課.

淀江賢一郎(1996)中国地方の絶滅の恐れのあるチョウ. 昆虫と自然, 31(13): 6-9.

最近、中国地方から出版された本・2

① 中村慎吾(2011)「虫と草木と人びとと第2集」B5判, 306pp., 非売品. シンセイアート出版部。
80歳を記念に出版されたものだという。一読してその文章の若々しさに驚嘆する。目次を見ると、ミヤジマトンボの発見者 結城次郎の生涯、里山と生物の多様性、ニシキキンカメムシとカムシの民俗、植物と民俗、G.ホワイトと「セルボーンの博物誌」、春の中国山地を歩いて思うこと、小川光昭と「草花の博物誌」、小川光昭先生の思い出、理科教育と「総合的な学習の時間」、中村慎吾著述目録からなる。そのすべてが軽い随筆などではない。長い時間をかけた仕事の集大成である。私は結城次郎やセルボーンの博物誌には以前から関心を抱いていたのでとりわけ興味深く読んだが、いったいどうやってこれだけのことを調べることができたのだろうか。著述目録には677編、著書は20冊余(その中には「広島県昆虫誌I・II」「日本産カミキリムシ食樹総目録」「広島県の蝶 過去と現状」などの大冊も)。さらに、この目録にはあげてないが、先生の仕事には「比和の自然」「広島県高野町の自然誌」等編者としての大作がいくつもある。地域の同好会誌だった「比婆科学」を60年以上主宰されているし、中国地方ではトップの文献と標本が揃った「庄原市立比和自然科学博物館」を実質的に一人で担ってこられた。国交省が始めた「河川水辺の国勢調査」を日本の昆虫学者のなかでもっとも有効に活用されてもいる。ご健康に留意され、次は88歳で第3集を編んでいただきたいと願うばかりである。なお、2000年に第1集「虫と草木と人びとと」(A5判, 256pp., 2000円. シンセイアート出版部)を発刊されている。内容は、博物学の周辺、中国山地—その生物的自然、虫たちとともに、台湾の博物誌、ナチュリスト群像など。未読の向きはまずこちらから読まれるのもおすすめする。

② 小林一彦(2011)「自然の魅力を伝えづけて逝った—中国山地を中心とした30年間の自然案内記録」
A4判, 288pp., 自費出版. 小林京子編。

小林先生はあまり知られていないかも知れない。なにしろ学会とか権威とか名誉とか世俗的なことが大嫌いだったから。しかし実力は折り紙つきである。あの今をときめく虫屋・永幡嘉之さんが鳥大の学生時代心酔していたのだ(先生も永幡さんを後継者と思っていたようだ)。55年以上前、高校生のころすでにゼフィルスの円巴飛翔の意味を語り、キマダラルリツバメ幼虫を観察し、ギフチョウとカンアオイの矛盾した生息域について論じておられたのである。先生は「鳥取自然保護の会」を長年主宰しておられた。この会は名称のイメージと違い、オバサンたちの先鋭的な山登りグループだった。その月例会のためエネルギーを注ぎ込んで書きあげたプリントが本書の礎である。世に山登りガイドブックは数多いが、本書は類書とは思想がまったく異なっている。人文、歴史、地理、地質、植物、昆虫などの分野のプロが読んでも視点の鋭さにうならされるだろう。

先生没後、奥さまの手によって「駆け抜けた72年ナチュリスト小林一彦追悼集」(2009)に継ぐ2冊目が刊行されたわけだが、引き続き3冊目4冊目が出るのがますます期待される。余談ながら、小林先生が東京の大学を出て高校教師として最初に赴任したのが倉吉の高校だった。奥さまはそのときの生徒さんである。この本は奥さまの深い深い愛情なくしては生まれえなかつたであろう。

2冊を読んで思い起こしたのは「ナチュラル・ヒストリー」という言葉である。明治のころは「博物」と翻訳され古色蒼然としたものとなつたが、日浦勇さんらによって、本来の史的なものの見方をするサイエンスとしての「自然史」に生まれ変わった。2005年、養老孟司氏がロンドンに住む世界一の金持ちで博物学者だったロスチャイルドの末裔(70歳代の婦人)に会い、「ナチュラル・ヒストリーとは何か?」と質問したところ、「人の生き方そのものである」という返答だったという。養老先生はたいへん感銘を受けたと聞いた。中村慎吾先生も故小林一彦先生も、その生き方は「ナチュラル・ヒストリー」そのものと言えるのではないだろうか。(淀江賢一郎・記)

編集後記: 第13号をお届けします。これでとりあえずの小生のお役目は果たすことができました。ご協力いただいた皆様に感謝申しあげます。面白くて役に立ち(すなわち読んだら捨てる本でないということ)、シニア向けに大きな活字でつくることを心がけました。チョウ・蛾の楽しみは数ある趣味のなかでも特Aランク。シニアには健康維持にもボケ防止にも。私もナチュラル・ヒストリーを目指すナチュリストでありたいと思います。 (淀江)

日本鱗翅学会中国支部会報 第13号

発行日: 2012年4月30日
発行人: 淀江賢一郎
発行者: 日本鱗翅学会中国支部
〒690-0862 松江市比津が丘2-1-7 淀江方
印刷所: 株式会社 トライ・エックス

目 次

中国支部第13回例会の報告 1-2

発表要旨

1. 鳥取県のガ類に関する文献目録 田村昭夫	3
2. 岡山県のカトカラ属—その生態写真 伊藤國彦*・難波通孝(*演者)	4-7
3. 「山口県の昆虫類レッドリスト2011」における鱗翅目の選定について 後藤和夫*・川元 裕・中西 淳(*演者)	8-9
4. 山口県南西部におけるフチグロトゲエダシャクの記録と生態 渡辺一雄*・管 哲郎・後藤和夫・岡村元昭・中西 淳(*演者)	10-13
5. 冠高原のミナミアカシジミについて 神垣健司	14-15
6. インドネシア・ビリトン島のアリノスシジミ 淀江賢一郎	16-17

中国地方5県のチョウ類レッドデータ・リスト一覧

淀江賢一郎・三宅誠治・神垣健司 18-24

お知らせ 2

1. 第14回支部例会のご案内
2. 支部助成金
3. 支部会報14号の原稿を募集

日本鱗翅学会中国支部規約 表紙2

新著紹介・2 表紙3

中村慎吾 (2011)「虫と草木と人びとと第2集」

小林一彦 (2011)「自然の魅力を伝えつづけて逝った—中国山地を中心とした30年間の自然案内の記録」

〈表紙写真〉

山口県のフチグロトゲエダシャク♂(山陽小野田市高畑, 2012年2月29日 14:16, 後藤和夫撮影)

前日の曇り空から、この日は朝から日が差したため恒例にしている探索に出かけた。枯れ草内を歩き始めて直ぐ、本日羽化したと見られる本種が飛び立った。約3m先のススキの茎に止まったため、静かに近づき時間を掛けて撮影することができた。(後藤和夫)